

<実践報告>

中学校の学年会を活用したチーム援助を目指して
 —援助ニーズの高い生徒への
 的確な見方・有効なかかわり方をもつための方法を探る—

板橋美由紀 川崎市立西高津中学校
 金丸 幸生 川崎市立稲田中学校
 小久保裕之 川崎市立高津小学校
 筒井 愛子 川崎市立桜本小学校

Aiming at the Team Support That Utilizes the Section Meeting of a Junior High School —To Investigate the Appropriate Attitude Toward the Students Who Require the High Level of Support Needs—

ITABASHI Miyuki: Nishitakatsu Junior High School, Kawasaki City

KANEMARU Yukio : Inada Junior High School, Kawasaki City

KOKUBO Hiroyuki: Takatsu Elementary School, Kawasaki City

TSUTSUI Aiko: Sakuramoto Elementary School, Kawasaki City

研究の目的	援助ニーズの高い生徒についての、的確な見方や有効なかかわり方へとつなげられる情報を共有できる場として学年会を活用し、その効果を検証していく。また、必要な情報を短時間で共有するためのワークシートを開発していく。
キーワード	学年会 ワークシート チーム援助
実践の内容	学年会の活用の仕方、ワークシートの作成
実践者名	第一著者～第四著者と同じ (川崎市総合教育センター 学校教育相談研究会議)
対象者	川崎市立中学校1校2年生(37名)
実践期間	2005年6月～12月
実践研究の方法と経過	中学校の学年会に、二次的援助サービスが必要と思われる生徒についての情報をワークシートで提示する。シートには見立てや目標、有効な手立て等を書き込み、それを参考に教師は生徒とかかわり次回の学年会で新たな情報を共有する。
実践から得られた知見・提言	学年会では抽出児を的確にとらえ、有効な手だてに関する情報交換や他の生徒への応用にもつながった。ワークシートからは抽出児の多面的な姿が見え、教師の実践の振り返りへつながること、また様々な副次的効果も明らかになった。

1. はじめに

教科担任制の中学校では、学級担任が学級の子どもとかかわる時間が少なく、教科担任も自分の授業以外の子どもの様子は把握しにくい状況があるなど、教師が援助ニーズの高い子どもを多面的にとらえることがなかなか難しい現状にある。

本研究では中学校に視点を当て、子どもを多面的にとらえる機会として新たに会議を設定するのではなく、学年会を活用することにした。また、短時間で有効な会議となるようにワークシートを作成した。そして、学年会とワークシートを通して、子どもにかかわる教師と養護教諭、スクールカウンセラーが、援助ニーズの高い子どもを的確にとらえ、有効なかかわりをもつ「チーム援助」へつなげられるように試みた。

複数の目からとらえた情報は、個々の教師がもっている援助ニーズの高い生徒についての一場面だけの見方から多面的にとらえる見方につながり、それが的確な見方、有効なかかわりへ発展していくのではないかと考える。そのかかわりが広がれば、授業や日常生活などの一日の活動を通して、一人一人の生徒に合った援助が生まれるとともに、点から面への連続性のある有効なかかわりとなり、生徒が抱えている問題状況の解決への糸口になるのではないかと考え、本研究の主題を設定した。

石隈(1999)は学校心理学の立場から、3段階の援助サービスが必要であるとしている。本研究では、この中の二次的援助サービスの対象となる「気になる生徒」をどのように援助していくかという点に重点を置く。この段階の生徒は実際のところ見落されやすく、場当たりの指導を受けがちではないだろうか。二次的援助サービスを必要とする生徒が抱える問題の解決のためには、生徒の一場面だけを理解した教師が、共通した理解をもたずにかかわる状態では不十分であると考えられる。問題状況を早期発見し、タイムリーな予防的援助をすることができれば、問題が解決する可能性は十分にあると考える。多面的な情報や、その時点で必要と考える目標などの情報をもった複数の教師が生徒とかかわれば、学校生活の中で生徒が安心して過ごせる時間が増えていくことにつながるのではないだろうか。本研究では、それをチームとしての援助であるにとらえる。チームによる援助については、文部科学省の「少年の問題行動に関する調査研究協力会議報告(2003)」や神奈川県教育委員会の「ティーチャーズガイドⅡ チームで取り組む日々の実践と不登校への対応(2005)」等の中で、問題行動や不登校への対応策としてその必要性が示されている。

本研究のチームとは、援助ニーズが高い生徒に対して一斉に同じ援助を行うことではなく、「共通した情報を持ちながら、同じ目標のもとで複数の教師がそれぞれにできることを行う援助の形」であるにとらえ、その上で生徒の変容を追いながら、次の2点を研究の目的として、実践・検証を進めていくこととした。

- (1) 短時間で必要な情報を共有するためのワークシートを開発していく。
- (2) 援助ニーズの高い生徒についての、的確な見方や有効なかかわり方へとつなげられる情報を共有できる場として学年会を活用し、その効果を検証していく。

2. 研究の方法

2.1 ワークシートの開発

「石隈・田村式援助チームシート（石隈・田村，2003）」「援助資源チェックシート（石隈・田村，2003）」を参考にワークシートを作成する。ワークシートは毎回新たなシートを作成し、必要な項目を組み合わせたものを活用することとした。

2.2 学年会によるチーム援助の実践

(1) 抽出児の決定

2回にわたり授業観察・授業リフレクションを行い、担任からの普段の様子も参考にしながら、二次的援助サービスが必要と思われる生徒の中から抽出児を決定する。抽出した2名の生徒の概要を表1に示す。

表1 抽出児の概要

Aさん		Bさん
心に何か引っかかり，本人が悩む	抽出理由	問題行動を起こしていて，その影響が周囲の生徒や教師にも及ぶ。
体調を崩しやすく，欠席が比較的多い。	健康	健康である。
まじめでやさしい。	心理 家族 行動	社交的だが，気持ちを大きな声で表現する傾向がある。
友人とのトラブルを自力で解決するのが難しい。		自分勝手な進め方に周りがついてこないことも多い。
意欲はあるが，結果になかなかつながらない。	学習	提出物を期間内に提出するのが難しく集中が続かない。

(2) 学年会の準備と実施

「準備→学年会→参加者へのアンケート実施とまとめ」という流れを7月，8月，10月，

12月の4回行った。事前の準備において学級担任は，現状を把握したり目標等を設定するために，教科担任や部活動顧問，養護教諭，前学年の担任などが持っている情報を，図1のようなシートに集めておく。学年会の一週間前から

〇〇さんこれまでの情報整理シート	
年 月 日	
生育歴	
小学からの 申し込み	
1年次	
2年次	

	担当	様子
国語		
社会		
数学		
理科		
英語		
音楽		
美術		
技家		
保健		
総合		
学級		
養護		
SC		
部活		
家庭		

図1 情報整理シート

いまでに情報を聞き取るようにし，学級担任または本

研究会議が，これらの情報を開発したワークシートにまとめていく。ワークシートは学年会の前に参加者に配布し，事前に目を通せるようにしておき，学年会の中では短時間で情報を共有できるようにする。今回は，学年会が放課後に行われることが多かったので，そ

の日の午前中に配布するようにする。

学年会は毎月行われる通常の学年会の時間を活用する。その中の学級情報交換の時間において、学級担任がワークシートを活用しながら、ポイントを絞って短時間で抽出児についての報告を行い、今後の指導の方向性等について確認するために、その場で参加者が最近の状況や今後の手立て等について意見を出し合う。

学年会後、参加者に記述及び口頭により、下の項目でアンケートを行い、本研究会議でまとめる。

- | | |
|---|--|
| 1 | 会議に使用した資料について、会議の雰囲気について。 |
| 2 | 会議を通して抽出児についての新たな気づきや見方の変化について、変化の状況や原因について。 |
| 3 | このような形式で生徒理解・指導を進めていくことについて。 |

また学年会で新たに得られた情報

はワークシート等にまとめておく。

3. 結果および考察

3.1 ワークシートの開発

「石隈・田村式援助チームシート（石隈・田村，2003）」「援助資源チェックシート（石隈・田村，2003）」を参考にしながら改良・開発した。

（図2，3）石隈・田村式は一枚のシート

を継続的に活用するが、今回は毎回新たなシートを作成した。また、シートは個人情報情報ということもあり、取り扱いには十分注意するように呼びかけた。以下、作成上意識したいくつかの点のうち6点について、活用した教師たちの評価も含め

図2 初回用ワークシート

図3 継続用ワークシート

てまとめる。

(1) 生徒を取り巻く人間関係が一目で分かる

学級担任は、「学年会のたびに人間関係の円に、多くの教師とのかかわりの線が増えてよかった。」という感想を持っていた。他の教師とのかかわりが図式化されたことは、視覚的にも学級担任の安心感や負担感の減少につながっていったものと推察される。

参加者からは、「関係図によってそれぞれの立場が明確になり、自分がどの位置でかかわればいいのか確認できた。」「様々なかかわりが具体的にかかれており、取組状況がわかりやすい。」「手立てを図式化すると、こんなにもたくさんの援助ができるのかと思った。」といった記述があり、普段のかかわりをあらためて図式化することで、かかわりを客観的にとらえる効果があったのではないかと考えられる。

(2) 有効な手立てや逆効果な手立てなども表す

それまでに効果があった、もしくは逆効果だった手立てを共有したり、それをヒントに次の手立てを考えられるようにするという目的で設定した。参加した教師の自由記述では、「現状や手立てから効果までの流れが具体的に分かりやすく参考になる。」「前回から今回までの本人と周囲の状態が把握でき、今後に有用だと感じた。」「普段口頭で伝え合う事を見やすくまとめることでより深く考察できたように思う。」といった感想があり、子どもの様子だけでなく、教師とどのようなかかわりがありどのような効果があるのかななどを、改めてワークシートに明記することは、援助する上で有効であったことが推察される。

(3) スクールカウンセラーや養護教諭の視点を加える

臨床心理、健康とそれぞれの専門家の見立てや考えられる効果的な手立てを入れることとした。これにより、スクールカウンセラーと養護教諭が学年会に参加できないときでも、その見立てを学年に伝えることができた。またこの記入のためには、学級担任が抽出児について、日頃からスクールカウンセラーや養護教諭と連絡を取り合うことが必要となる。学級担任が「学年会を通じ、スクールカウンセラーから専門的なアドバイスを受けることができた。」「日頃からよくスクールカウンセラーと話をするようになった。」「養護教諭は自分を援助してくれている感じ。これは抽出児に対して共通理解を持っていたからだと思う。」と振り返っていることから、教師・スクールカウンセラー・養護教諭の連携が深まったことが推察される。

(4) 気になる面ごとに目標を3つの時期に細分化する

学習面や健康面、心理・社会面などについて、石隈・田村式を参考に、いいところや気になるところを書き込むようにした。これについては、参加した教師から「いいところや気になるところがあるので参考になる。」といった自由記述が見られた。一方、その部分をまとめた学級担任は当初、いいところや気になるところでは埋められない欄があった。普段目にしやすい部分はいいことも気になることも書きやすいのだが、学習、健康、心理・社会面のすべての面を記入するという事は難しかったようである。しかし、第2回学年会用ワークシートではすべての面を埋めることができた。これは、ワークシートを書くと

いう作業をするために、それまで見えなかった抽出児の新たな面を見ようとした学級担任の変容であったと推察される。

また、それぞれの面について目標を短期（1ヶ月後）、中期（学年終了後）、長期（中学校卒業後）の3段階に分けて表示していくこととした。目標とは本来、生徒本人が「こうなりたい」と希望するものを優先されるべきであると考えた。しかし、今回は時間等の都合ではじめは、「生徒自身がこうなるといいだろう」と、教師側が考えて決めた目標とした。その後、学級担任が学級全体に「2年生終了までにこうなっていたい」という目標をつくる機会を設定したことにより、抽出児本人の意思が表れたので、その後はその意志を尊重して目標を設定することにした。そして、各目標に合わせて、どのような手立てが取れるのかを検討した。さらに、学習面や心理面などの中でも、その時期に一番重要視したい面を選び、学年会ではその部分を強調して協力を得られるようにした。

実際に作成してみると、どのような目標を立てるかによってその後の手立てや周囲とのかわりなど、ワークシートに書き込む内容が変わってくる。そのため、目標の設定は慎重に行わなければならないと実感した。と同時に、はじめに立てた目標は大事にしたいが、その後の生徒の状況に応じて、優先する分野を変更したりスモールステップ化するなど、臨機応変に目標を設定しなおす必要性も感じた。実際、目標の変更や目標のスモールステップ化を実践したことが、抽出児が好転するきっかけの1つともなったことから、目標の設定が援助の方向性に大きく影響することが考えられた。

(5) 生徒の状況に合わせて、書き込む項目をパーツとして自由に入れ替える

学習面で援助が必要な生徒、人間関係がうまく取れず悩んでいる生徒、反社会的な行動を取る傾向のある生徒などさまざまな生徒がいるが、すべて同じシートでなく、必要な部分のフレームを大きくしたり、またその生徒に必要なパーツがあ

図4は、生徒の状況に合わせて自由に入れ替えることができるワークシートのパーツを示しています。図には、以下のような項目や要素が含まれています。

- 「保護者での様子」
- 「保護者の思い」
- 「教室での様子」
- 「行動の背景として考えられること」
- 「子どもの行動の背景を理解する必要が大きいときなどに」
- 「他情報がない」
- 「医療機関、児童相談所、通所指導学級などがらコメント」
- 「日本語指導が必要な子どもはここに...」
- 「担任指導コーディネーターの状況」
- 「前年度の担任」
- 「医療機関、児童相談所、通所指導学級などからのコメント」
- 「コソチの円」
- 「小さなチームでの動きを入れても...」
- 「欠席、遅刻、早退」の記録表（4月、5月、6月）
- 「大切な個人情報ですので、シートは個人で取り扱ってください。会議での活用後は、まとめてシュレッターする、厳重に保管するなど、統一した取り扱いをお願いします。」

図4 その他のパーツ

加者にとっては分かりやすいのではないかという理由から、ワークシートは1つの形と固定化せず、生徒の状況に合わせて自由に入れ替えられるようにした。(図4) 参加した教師の自由記述では、「余暇活動の欄があると、さらに支援策が見つかるかもしれない。」といった要望があり、個々の生徒に合ったワークシートが必要だと考える声も聞かれた。

(6) 子どもの変化やかかわったことへの手ごたえが感じられるようなワークシートにする
 学年会に向けての準備として、抽出児にかかわる教師にその様子を聞き取るが、その際、
 気になるエピソードや効果的な手立てや新たな手立て、抽出児の変化が聞き取れた場合、
 できるだけワークシートに書き込むようにする。「〇〇先生がこのような手立てを取った結
 果、△△のように変わった。」などとその流れを各パーツに明記した。

学年会は生徒の姿が直接見えない中で行われるため、人間関係の円の中心に抽出児のイ
 ラスト（似顔絵）を載せることとした。初めて学年会でワークシート取り扱う時には、そ
 のときの抽出児の様子に合わせて、イライラしたり困った顔つきの似顔絵を描いたが、抽
 出児の様子が好転したこともあり会を重ねるごとに少しずつ笑顔の似顔絵にしていた。

「似顔絵が似ていると話題になった」と学級担任が振り返っていて、場の雰囲気をややか
 にしたという効果があったと推測される。

3.2 学年会におけるチーム援助の実践

準備と学年会を各4回実施した。その結果を、①学年会への評価、②雰囲気、③抽出児
 のとらえ方の3点から報告する。

(1) 学年会への評価

12月にアンケートを行った。まず、学年会
 で出された生徒の見方やかかわり方は、今後
 活用できそうかと尋ねた。その結果、児につ
 いては14人中10人、抽出児以外については
 14人中11人が活用できる見方やかかわり方
 があったと回答した(図5)。学年会で出され
 た内容は、抽出児以外にも活用できると感じ
 た教師が多かったことは図1から分かるが、
 自由記述にも、「Bさんは私のクラスのCさ
 んと似ているかもと思った。自分のクラス
 の子に当てはめて考えることができるのも

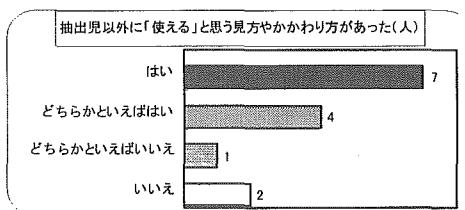
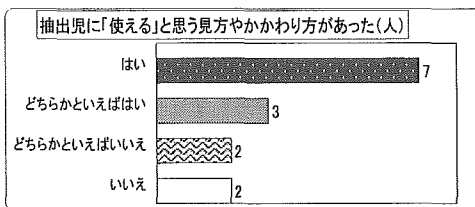


図5 学年会を通じて「使える」と思った
 見方やかかわり方があった(人)

学級担任にとっての大きな収穫だと思う。「私の学級の生徒もこのような形で私の中で考
 えていきたい。」といった感想があり、抽出児以外の生徒への応用へとつながる会となって

表2 学年会で出された手立てで使えると思った、または使った手立て

抽出見方や手立て(抜粋)	情報元	本人に(10人中)		他の生徒に(11人)	
		使える と思っ た(人)	使った (人)	使える と思っ た(人)	使った (人)
目標をスモールステップ化する	研究会議	6	1	4	5
周囲には「見えないけれど痛みがある」と理解させる	SC	6	1	6	2
衝動性が高く、注意力に欠ける面がある	研究会議	6	3	6	0
人間関係をかき乱す言動を抑える練習をする	SC	4	3	4	3
「かき乱す生徒に巻き込まれない」という教師側の共通見解	SC	7	3	7	4
注意は短く、具体的に	研究会議	5	5	3	3

いたことが推察された。さらに具体的にどのような情報が有効かを詳細に調べたところ、最も使えると思った情報は、抽出児本人と他の生徒の両方とも「かき乱す生徒に巻き込まれないという教師の共通理解」であった。実際に抽出児に活用した手立てとして最も多かったのは「注意は短く具体的に」であった。

抽出児以外に使った手立てとして最も活用した手立ては「目標をスモールステップ化する」であった(表2)。参加した教師の自由記述からは、「現状、手立てなど詳しく記されていると共通理解ができ対応しやすい」という感想があった。ボリュームゼロという取り組みが報告された会の際には、「声のボリュームがゼロにできないと聞き、確かにそうだそうだ!と思った。」という記述があった。また学級担任は、すぐに取り組める手立ては積極的に活用し、その効果を実感することが多かった。

スクールカウンセラーや養護教諭が参加する学年会では、教師への情緒的なサポートよりも、「新たな見方が持てそうだ」「客観的な意見が聞けそうだ」「自分の対応に応用できそうな助言等がありそうだ」など、生徒とのかかわりの中で活用できる情動的・道具的なサポートに対する期待を持っていることが、参加した教師のアンケートから明らかになった。

(図6) これらのことから、教師の指導・対応方法を具体的な行動レベルで示しているものが活用されやすいことが推察された。なお、スクールカウンセラーと養護教諭が学年会に参加しての感想に、「学級担任が一人で抱えると大変だが、みんなで支援して良かった。」「周りの教師も共有した問題として考えてかかわるので、学級担任は安心感を持てるということを再認識した。」とあり、学級担任を支援する場として学年会が機能していたことが推察される。

今回は、周囲に大きな影響は及ぼさないが、自分自身が困っている状況のAさんと、自分中心の言動が多く、周囲にその影響が現れているBさんという違ったタイプの抽出児を対象としてきた。最終アンケートで「抽出児とかかわる際の最近の行動や感覚」を尋ねたところ、「以前と特に変わらない」と答えた教師がAさんに対しては12人中5人、Bさんに対しては3人であった。逆に、「どんなかわりがいいかを意識してかかわるようになった」という点においては、Aさんに対しては2人、Bさんに対しては4人であった。(図7) 自由記述でも、その行動や教師とのかかわりの様子についてAさんよりもBさんについての方が記述が多かった。また、教師の自由記述には、「Aさんのことで

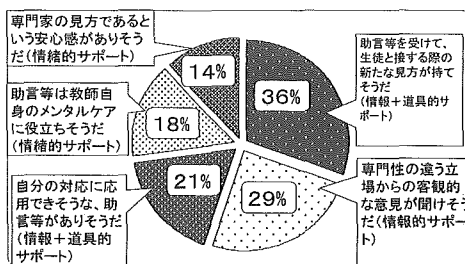


図6 今後、スクールカウンセラーや養護教諭が参加する学年会で可能性として持てそうだと思われるサポートの内訳(%)

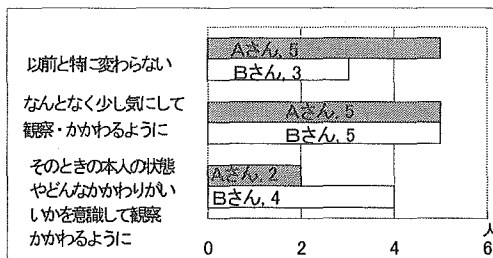


図7 抽出時とかかわる際の最近の感覚や行動で当てはまるもの

発言した先生が少ないように感じた。」という感想があった。これらのことから、学年会に参加した教師は、負担感の大きな生徒の取り組みの方により効果を感じ、日頃接するときには学年会で出された情報を生かしていたことが推察される。

(2) 雰囲気

緊張感を持って臨んだ学級担任であったが、学年会後の聞き取り調査では、学年会で多くの教師からいろいろな情報が出されることで安堵感や連帯感を感じていた。

普段から良い雰囲気で行われていた学年会を活用しての研究であったが、参加した教師からは、「リラックスした自由な雰囲気がよかった。」「生徒の状態を把握しようとしたり、接し方について考えたりするような雰囲気があり大変良いと思う。」といった記述があったことから、いつもの雰囲気を保って進めることができたと推察される。

(3) 抽出児のとらえかた

A さんの変化

体調を崩し休みがちだった A さんが、第一回検証学年会後、学級担任・部活動顧問、養護教諭の連携もあり、部活動に参加できるようになった。その後、突然全く登校できない時期があったが、その間は学級担任や学年職員が連携しながら A さんと接点を持ち続ける一方、学級担任は登校したときのために、A さんについての情報を折に触れて学年に流すように心がけた。一ヵ月後、登校できるようになった。A さんは、その後、友人関係、学級担任との関係も良くなり登校し続けている。

B さんの変化

反抗的態度が続いていた B さんだが、学年会で取り上げた後に反抗がおさまリ、学校ではおだやかな時間が増え、本人、学級担任、保護者の関係も良好になっていった。

学級担任からは「自分の知らない A さんの姿が見えて A さんの見方が変わった。」「B さんについて保護者と良い関係もあると聞き、安心した。」という感想も聞かれた。参加した教師の自由記述では、「多くの視点から一人の生徒をじっくり見つめていくと気づくことが多いと分かった。」「家庭や学級担任、教科担任などからの情報で、バランスよく生徒を観察し接することができ、プラスに転じる場面が多くなっていくのではないかと思う。」といった、多くの視点を持ったことに関して一定の評価を示す記述が多かった。これらのことから、学年会を通して、参加者は抽出児への新たな視点を持つことができ、さらにその効果を実感していたことが推察される。

また、「9 月以降の接し方の参考となった。」「目標のスマールステップ化、家庭状況の再確認ができてよかった。」という自由記述があり、抽出児にかかわる教師が、学年会の中でその後のかかわり方を確認しあう場として機能していたことが推察される。

「様々な立場の人が同じ手立てを意識して生徒とかかわることにより、それぞれの声のかけ方や接し方や場面が違ったとしても、何らかの変化が得られるということを感じた。」という記述からは、教師それぞれが自分のスタンスでかかわるものの、共通した理解を持っていることがプラスに働いていたことが推察される。

4. 今後の課題

ワークシートを作成する負担は決して軽くない。しかし、一度作成する、または目を通しておくことで生徒への理解が深まることが明らかになった。これについては、例えばチームの中に書く役割をつくり、学級担任の精神的・実践的負担を軽減できるのではないかと考える。書籍や研究会等で様々なワークシートも提示されているので、生徒や学校にあわせて活用することが望まれる。しかし、いずれも個人情報を含むものであり、慎重に扱うことに留意する必要がある。

援助ニーズの高い生徒をすべて学年会で取り上げることは、現実的には難しい。しかし、学年会参加者から「自分のクラスの〇〇と似ている。」という記述があったように、ケースを重ねていくことで、他の生徒に応用できる面が生まれ、すべての生徒を同様に取り上げる必要はなくなると思われる。ただ、学級担任は、抽出児を取り扱う時間が長くなってしまふとやりにくさを感じており、多忙な中で貴重な会議の時間を活用していることから、ワークシートを使って、何をどのように共有していくのかを吟味し、さらに短時間で実施することが課題となった。また、状況に応じて、学級担任、スクールカウンセラー、養護教諭といった小グループで動き、必要な報告は学年全体に行う形も可能である。特に不登校の場合、小グループで動きながらも、学年全体に生徒の様子を継続的に知らせ、生徒についての的確な見方やかかわり方を伝えておくことで、次に生徒が登校できたときに効果的な教師のかかわり方が期待できると思われる。運営面ではコーディネーター的な役割を誰かが担い、学級担任と共に準備等を進めることが望ましいと考える。

養護教諭がすべての学年に毎回参加することは難しいが、情報交換の時間だけでも参加したり、学期に一回は各学年に参加したりするなどの工夫も考えられる。スクールカウンセラーについては、教育相談センターのスクールカウンセラー向けのアンケートで、年々学校との連携は図れていると感じる割合が増えているという結果が出ている。しかしその連携のあり方については、まだ模索しているという記述が多い。学年会への参加を、連携を進めていくひとつの選択肢として考えてみることもできるのではないだろうか。

文献

石隈利紀，1999，学校心理学，誠信書房

石隈利紀・田村節子，2003，石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門
学校心理学・実践編，図書文化社

神奈川県教育委員会，2005，ティーチャーズガイドⅡ チームで取り組む日々の実践と不登校への対応

文部科学省，2003，少年の問題行動に関する調査研究協力会議報告

(2006年4月30日 受付)